

問答歌」であろう。また、『万葉集』中においても異色の歌であり、他に「貧窮」を詠んだ歌は見られない。この歌は、筑前国国守であった憶良が大宰府長官の大伴旅人と共に九州で多くの歌を詠み、その任期が終えて後に、京に帰って来てからの作品と考えられる。今回は、「貧窮問答歌」について、次のような方面から考えていきたい。

一 用字―「モ（毛・母）」の表記の仕方。

付・語彙―「ア」と「ワ」。

二 構成―長歌の構成はどうなっているか。

三 時代―天平四年前後の時代背景。

四 中国情勢―主に憶良渡唐期の情勢。

五 謹上相手―諸説の整理。

以上五点から、憶良は何故「貧窮問答歌」を詠んだのか、考えてみたい。

漱石と子規の漢詩についての一考察

―漢詩の応酬による交遊―

博士前期課程 二年 徐 前

漱石と子規は同じく幼い頃から漢文学に親しい文学者である。両者はともに中国古典から深い影響を受け、漢文の教養を持ち、生来詩人的素質に恵まれているが、ついに漢詩を以て世に処することがなかったのである。子規は十二才から既に漢詩を作り始め、詠んだ漢詩は約二千首にのぼるといわれる。生前自選した一冊の『漢詩稿』

（六百二十二首）が残されている。それに対して、漱石が漢詩を作り始めた時期は子規より遅かったようで、作品数も少なく二百八首しかない。しかし、何れにしても才気は溢れているもので、しかも吉川幸次郎によって評価されたように「例外的に思索者の詩」である。漢詩は漱石と子規の文芸の重要構成部分で、余技として看過してはならないものである。

漱石の漢詩を作る意欲は子規の刺激を受けて初めて出てきたといわれる。漱石が明治三十三年にイギリス留学するまでに作った漢詩は全部で七十六首である。その中、子規との交遊に関わったもの『七艸集』に評する九首、『木屑録』十四首、『函山雜詠』八首、次韻唱和など）は大半を占めるのである。子規の漢詩には漱石に関係するものもかなりある。

漱石と子規の漢詩は同じ趣旨のものもあれば、違った志向などを示すものも多い。ここで、両者の交遊時代の漢詩に着目し、両者の題材や内容上の特色などの異同を探索しながら、比較の視点から漱石と子規の漢詩人としての一側面を考察してみたい。

『道草』の文体・表現効果についての考察

博士前期課程 二年 三 浦 高 人

小宮豊隆の「漱石は高い所からそれを見下ろしつつ、その健三の善い所と悪い所とをそれが他人でもあるように、公平に「私」なしに、指摘する。」（『漱石の芸術』S17・12・9 岩波書店）以来、『道草』の表現方法（文体）の評価は、公平かつ無私的であるとして